

病気でないのに15歳まで入所 ——朝鮮半島にルーツをもつハンセン病療養所 入所者の子どもからの聞き取り——

黒坂愛衣*・福岡安則**

発病していないにもかかわらず、ハンセン病療養所で15歳まで暮らした、50代女性Aさんのライフストーリー。父親は、植民地支配時代に朝鮮半島から日本へ渡った在日1世で、Aさんが生まれる2年前にハンセン病を発病した。母親は九州地方出身。

Aさんが1歳前後の頃、父親が、九州地方にあるハンセン病療養所に入所。まもなく両親は離別し、幼かったAさんは、父親のもとへ寄せられるかたちで、おなじ療養所で暮らすようになった。療養所では、同年代の子どもたちと寝起きをともにし、療養所内の小中学校で学んだ。

15歳のとき、療養所を出て関東地方で働き暮らすことを決意。この時点で、自分の戸籍が存在していないことが判明した。父親が母親に連絡し、母親の戸籍に入籍した。

“父親がハンセン病療養所にいる”“自分もかつてそこにいた”ことを隠す意識は、退所後、早い時期からあった。職場の同僚とのおしゃべりで、故郷や通っていた学校についての話題になったときには、「しぜん」とウソをついていた。こうした意識は現在まで続いているとAさんは語る。

19歳のとき、職場の同僚と結婚。父親が「朝鮮のひと」であり「ハンセン病療養所にいる」こと、自分もかつてそこにいたことを、結婚前に夫に明かしたが、夫の結婚の意思は変わらなかった。ただし、夫の両親には、現在にいたるまでずっと隠し続けている。結婚式は、お互いの親を呼ばずに済ませた。それに、Aさんの父親と夫の両親とは、まだ一度も会ったことがない。これらは、お互いの親の住んでいる場所が遠かったために可能だったことで、「助かった」とAさんは語る。

Aさんには娘と息子がいて、ふたりともすでに結婚している。子どもたちは、Aさんの父親と、これまでに2、3回しか会ったことがない。娘が高校生だったとき、Aさんは娘に自分の過去を話した。つい最近、Aさんは初めて、娘と娘の子どもを連れて、療養所にいる父親のもとを訪ねている。いっぽう、息子にはまだ話していない。父親が「朝鮮のひと」であり「ハンセン病療養所にいる」ことは、Aさんにとって長年、周囲に隠さなければならない「重荷」であり続けた。この「重荷」を子どもにもたせることを躊躇している、とAさんは語る。

キーワード：ライフストーリー、ハンセン病、在日コリアン

* ころさか・あい，埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程2006年3月修了，日本学術振興会特別研究員(PD)，埼玉大学教養学部非常勤講師，社会学

** ふくおか・やすのり，埼玉大学教養学部教授，社会学

A さん¹は、1951 年に九州地方で生まれた女性（聞き取り時点で 54 歳）。父親は、植民地時代に朝鮮半島から日本へ渡った在日 1 世で、現在は「韓国籍」。母親は九州地方出身のひとだ。A さんには 2 つ年上の兄がいて、ふたりは「母のほうの戸籍にはいていた」という²。

A さんが生まれる 2 年前に父親がハンセン病を発症。その後、A さんが「1 歳になるかならないか」の頃に、熊本の菊池恵楓園に入所している。残された母子は、いつかは恵楓園ちかくの集落に住むようになるが、両親はまもなく離別。兄のほうは、恵楓園の「未感染児童保育所」（竜田寮）に入寮。そして、当時 2 歳前後だった A さんは、「病気じゃないのに」恵楓園で暮らすようになる。A さんは、入所以前の生活のことは覚えていないという。

1 「病気じゃないのに」ハンセン病療養所に入所

1.1 父親は故郷の肉親とは音信不通／母親の顔をおぼえていない

父親は「20 歳（はたち）ぐらい」のときに朝鮮半島から日本に来て、戦後もそのまま残ったと聞いている。「むこうに行ってもアレだから、ここで一花咲かせようと思ったんじゃないですか」。九州地方の炭鉱の町で「人の手配」をする仕事をしていたときに、母親と知り合い、そこで兄と A さんが生まれた。「そうしているうちに、[ハンセン病の] 病気になったから、[もう] 帰れなくなった」。それっきり、父親は、韓国にいる親きょうだいとは連絡をとっていないようだという。

A さんは、10 数年前にいちど、父親と兄といっしょに、韓国の慶州を訪れたことがある。

《A さん》父が、韓国、自分のふるさどに行ってみたって言って。慶州（けいしゅう）。でも [行ってみたら]、うちの親が住んでた場所が、なんか、開拓されて、違うところに移動してて。そのときに、父親は、はっきりと名乗って行くんだったら調べて行ったと思うんだけど [そうじゃなかったから]。タクシーの運転手さんが——うちの父 [は韓国語が] 話せるんで——、「ここにあった部落はこっちに移動しました」っていうとこまでは、行ったんです。そこへ行って、終わりになっちゃった。だから、[親戚の人たちには] 会ってない。

A さんは、このときにはじめて「うちの親 [のふるさと] は韓国だったんだ」とわかった。それまでは「勝手に、北朝鮮のひとだと思ってた」のだ。父親が、故郷の親きょうだいとまったく「行き来もしないし、連絡もとっていない」も

¹ A さんからの聞き取りは、2005 年 11 月 25 日午後、関東地方にある A さんの自宅でおこなった。聞き手は福岡安則、黒坂愛衣。A さんとは、2005 年 10 月 24 日、韓国・ソロクトと台湾・楽生院のハンセン病療養所入所者にも日本国内の入所者と同様の「補償金」を求めた裁判闘争のための都内で開かれた「判決前夜集会」で、ハンセン病遺族・家族の会「れんげ草の会」の会員の方から紹介されて知り合った。

² A さんはコリアンと日本人の「ダブル」であるが、国籍が「日本」であるだけでなく、名前も〇〇子（〇〇にはひらがながはいる）であり、韓国語読みは不可能な名付けである。A さんによれば、「父は私には日本名をと思ったそうです」。

のだから、「国交がない国のひと」だと思っていたと語る。

母親とは、2歳前後の頃に別れたきり「いちども会ってない」。だから、Aさんは母親の顔も「知らない」し、母親のほうの実家のことも「まったく知らない」という。最近になって、母親の戸籍にかんするものなど、いろいろな書類を取り寄せ、「母もまだ生きている」ことがわかった。取り寄せた書類によれば、聞き取り時点で「77歳」になる。幼いときに別れたきり「いちども会っていな」くても、AさんやAさんの兄は、結婚するまではずっと、母親のほうの戸籍にはいっていた。そのことで「迷惑かけていたんだなあ」と、いまになって思う。戸籍をみれば「子持ち」ということがわかってしまう状態だったからだ。それは「〔母親が〕若いときには、大きいこと」だっただろう。取り寄せた書類をみると、きょうだい戸籍から抜けたあとに、母親は結婚していた、とAさんはいう。

1.2 園の少女舎での暮らし

両親の離別を機に、当時2歳前後だったAさんは、父親のいる菊池恵楓園にはいることになった。もともと、父親の部屋でいっしょに生活するのではなく、園の少女舎にはいるかたちだ。いっぽう、2つ年上の兄は、熊本市内にあった「未感染児童保育所」の竜田寮に入寮した。

自分が「病気じゃないのに」療養所にはいったいきさつについて、Aさんは、つぎのように語る。

《Aさん》あの、今回、「らい予防法」国賠訴訟の熊本地裁の違憲判決を受けて補償〔金〕をもらえるんでね、いつからいつまで〔ハンセン病療養所に〕入っていたっていうのを書かなきゃいけなかったんですよ。それで調べてもらったら、いつ、わたしを、恵楓園に入れたかっていう記録が〔園のほうに〕ないんですって。〔恵楓園を〕出た記録はあるけど、入った〔記録はない〕。〔父〕親の〔入った〕記録はあるんです。

わたしは、なんか、ずるずると入れちゃったみたい。うちの〔父〕親が荒れちゃって、まあ、女の子でもひとりそばに〔置いておけば〕っていう感じでって、うちの父は言ってました。で、母親とも別れちゃったでしょ。——男の子〔=兄〕は外〔=竜田寮〕にいて。2人、入れるっていうのも、アレだから。そんなかんじで。わたしはぜんぜん、発病はしてないんです。……

〔父親は〕なんか、すごい荒れちゃって。働き盛りに病気になったし。もう、うまく生活もいかないんで。お酒——いまはぜんぜん飲まないんですけど、お酒飲んで、暴れたり。

7歳のとき、父親といっしょに鹿児島県の星塚敬愛園に転園することになる。なぜかはわからないのだが、「兄を熊本に置いたまま、〔父は〕わたしと2人だけで」鹿児島に移った。

《Aさん》なんで、兄だけ置いて、わたしだけ鹿児島に〔連れて〕行ったんでしょう？兄〔と〕は、だから、1年に1回ぐらいしか、会えなくなりました。〔熊本まで〕会いは行ってたけど。……

〔兄も敬愛園の「未感染児童保育所」に移していたら〕しょっちゅう、兄とも会えるじゃないですか。それなのに……。もう、兄とも、きょうだいという感覚はあまり〔ないです〕。異性みたいなかんじ。おたがいに、そういう感じですね。〔無防備に甘えるということも〕ない。

〔自分が〕親になってみて、思うことがいっぱいあるんです。なんで、父は、兄だけ、ああやって置いて。うまく、こっちへ連れてこれなかったんだろう、とか。そういうふうに〔父親に〕言うと、「連れてくるには手続きとかが大変だった」と。

Aさんは、7歳からはじまった敬愛園での暮らしを、よく覚えている。Aさんが敬愛園に移った当時、少女舎と少年舎には、あわせて「40人、いたかないなかったくらい」の子どもたちがいた。40代くらいの「やさしい」入所者の女性がひとり、みんなの世話をしてくれて、子どもたちは彼女のことを「おかあさん」と呼んでいたという。

食べ物、おとなの入所者が食べるものとおなじものが、園の炊事場から、飯盒にはいつて運ばれてきた。これは「まったくおいしくない。だから、〔なにを食べたか〕記憶にない」。

《Aさん》食べ物記憶って、まったくくないですよ。なにを食べてたんだろう。自分たちで、お味噌汁にご飯を入れて、グツグツ煮て。ちょっとバター——バターあったのかな、油をちょっと入れたりして、食べた記憶あるけど。で、そんなにお菓子なんかも〔なかった〕。

でも、ニワトリを飼ってたんですよ、少女舎で。卵は食べて。お正月とかだと、おかあさんがその鶏（とり）をさばくのを、〔子どもたちが〕手伝う。そこらへんに飼ってるのを、殺すでしょう。だから、鶏肉、食べれなかったです、しばらく。ご馳走なんだけど、目の前でこう、さばくのを見てるから。

あつ、そうそう。食べるものっていえば、少女舎のおかあさんが、畑してたんです。お芋とか、スイカをつくったり。それは、すごく記憶にあります。わたしたちも、自分たちで肥溜め、ちゃんをつくって、〔肥料をやるのを〕当番でやってました。〔収穫した〕お芋は、土手のとこに穴をあけて、そこに埋めてた。で、なんかつうと、そこから取ってきて。焚き火して、焼き芋して。——スイカも、熟したものを食べるから、すごくおいしくって。だから、外へ出たときは、スイカ、まずいな、と思ったの。

少女舎や少年舎の子どもたちは、朝の決まった時間に、治療棟に行く。「病気じゃない」Aさんも、みんなと「一緒に〔治療棟に〕通った」記憶はある。でも「注射を打ったりはしてなかった。治療は、なんにもしてなかった」とAさんは語る。

小学校と中学校は、敬愛園のなかの学校に通った。当時は、「なかの先生」——つまり入所者で先生をやっていたひとが、2人いた。そのうちのひとり「オランダ人の先生」で、英語を教えていた。あとはみんな、教育委員会から派遣された正規の学校教員だった。Aさんの時代、子どもは全部で40人前後と少なかったの、いくつかの学年が合同のかたちで授業をした。子どもたち

は職員室に自由に出入りできたが、「消毒のにおい」がしていたとAさんは語る。

子どもどうしの仲はよく、園内の古い納骨堂や、防空壕にはいって遊んだのを覚えている。女の子どうしでは「いじめとか喧嘩とか、そういうのはなかった」。いっしょに育った少女舎や少年舎の先輩たちを、みんな「おねえさん」「おにいさん」と呼んでいたという。

《Aさん》もう、なんせ、みんなと一緒に、よく遊びましたね。走り回ったとか、カンケリだの、ヒマワリごっこだの。なにしろ、いろんな遊びがあつて。それをみんなでしたから。わたしなんかは、あのなかにおいて、みんなで遊んだって記憶がすごく〔あります〕。……

小学校高学年の頃になると、園の外に連れて行ってもらうことも、たびたびあった。「町に行ったり、そこらへんの山に行ったり。あと、海。海なんかは、バスで、よく連れて行ってくれるんです。自分ひとりで園外に出ることも、「行こうと思えば」できたし、それで怒られることもなかったという。また、この時期には少女舎にテレビがはいり、「ローハイド」や「逃亡者」、「ひょっこりひょうたん島」「ララミー牧場」「流星号」といった番組を楽しみにみていた、とAさんは語る。

《Aさん》だから、逆に、あのなかにおいて幸せだったのかなって〔振り返って思います〕。外にいたら〔きっと大変だった〕。だって、うち、〔父〕親の親戚も〔日本に〕いないし、母の親戚ともつきあいでないでしょ。あのなかにおいて、小さいときからはいってたんで、なんか、そういうもんだって〔思ってた〕。なかで嫌な思いもしなかったんで。

1.3 「普通の学校に行ってみよう」

父親といっしょに入所したとはいえ、少女舎で暮らすAさんは、べつの舎で暮らしていた父親とは「毎日会うわけじゃなかった」という。

《Aさん》父は、からだが弱かったんで、しょっちゅう、〔園の〕なかの病室に入院もしてて。だから、そこの病室に遊びに行くとか、その記憶のほうがあつて。

うちの父は、けっこう、あの〔園の〕なかで、自分で商売してたみたい。たとえば、地金（じがね）とか。針金みたいな集めてきたりとか、おカネになりそうな配線みたいなとか。いま、こういうのが儲かるよっていうと、そういうのしたり。鶏（とり）をやったり、花をやったり。いろんなことをする人でした。結果は、あんまり儲からない（笑）。

Aさんが小学校4～5年生のとき、父親はいちど、ある入所者の女性と園内結婚をしている。しかし、この女性とは、1～2年で別れてしまった。その後しばらく独身でいた父親は、Aさんが中学卒業後に、「いまのお母さん」と園内結婚をしたという。

子どもの頃のAさんは、「おとなしくて、あんまりしゃべれない」性格だっ

た。「やっぱり、さびしいっていう気持ち、けっこう強かったですか？」という聞き手の質問にたいし、Aさんは「そうですね。母が生きてるといのは知ってるから」と答えている。

園の学校では、同学年の子どもは、Aさんのほかに1人しかいなかった。下の学年にはほとんど入ってこず、Aさんが中学1年になる頃には「[学校全体で] 10人もいなかった」。Aさんの1学年下の子どもたちの卒業で、中学校は「廃校になった」という。

中学生のときには、Aさんは「普通の学校とはちがう」「特別な世界にいる」という気がしていた。一時期、敬愛園を出て、よその児童養護施設に行きたい、と考えたことがあるという。

《Aさん》病気じゃないっていうのがわかったときに、外に出たくって、父に言ったことがあるんです。[園の外の児童養護施設に行きたい、と。] そういうところがあるって、聞いてたんで。そうしたら、もう、ぜんぜん[父はとりあわなくて]、「手続きが大変だ」みたいなかんじで。けっきょく、中学校出るまで、そこに[いたの]。……

あのなかだけだと、ほんと、同級生2人しかなくて。だから、普通の学校というのに行ってみたいっていう気が、すごくしたんです。べつにね、なかが嫌とか、そういうのはなくて。……

あすこ、[治療棟に] ○○先生っていう女の先生がいて。その先生に言われて、出たくなったのかもしれない。「[あなたは] 健康だから」って。[外に出たいと思ったきっかけは] 自分の意思じゃないと思うんです。なんか、そういうふうに言われて、「ああ、じゃあ、出ようかな」って。[でも、ダメだった。]

2 園の外に出て——「重荷」を抱え続けて

2.1 中卒で東京へ出てくる

中学卒業後、Aさんは園の外へ出ることになった。入所者の「オランダ人の先生」が、働き口として、「[日本に] いっしょに来たオランダの人」で、東京で洋裁の仕事をしている人を、Aさんに紹介してくれたのだ。そして昼間働きながら、夜間の高校に通うという話になった。

《Aさん》[東京へ] 出てくるときは、もう、ルンルンでね。やっと外に出られて、っていう気持ちで、ぜんぜん、さみしくなかった。行って、夜、寝たときは、さすがに泣いたけど。あとは大丈夫でした。

勤め先は、個人宅で洋裁の仕事をしているところで、「旦那さんが日本人、奥さんがオランダ人」だった。その個人宅には「縫い子さんが通いで来ていた」が、Aさんだけは「住み込み」のかたちだったという。

《Aさん》[生活環境が、それまでとは一気に] 変わった。食べるものから、なにからなにまで。——外国のひとつ、オープンレンジで、こう、やるじゃないですか。ああいうので、ハンバーグ作ってくれたり。オーブ

ン料理を、けっこうしてくれて。ははあー、と思って（笑）。……

奥さんも旦那さんも、息子さんがいて、お嬢さんもいたんですけど、すごくよくしてくれて。奥さんが外人だったでしょ。あの、外国のひとつというのは、使用人でもなんでも、下に見ない。家族として、〔扱いを〕してくれる。そのかわり、遠慮もなし。いけないことは、いけないって、はっきり、叱る。うちじゅう、よくしてくれる。

「見習い」の立場だった A さんは、この仕事場で「使えばしり」の仕事をたくさんしたという。

《A さん》仮縫いをしたのを、お店に運んだり。あと、みんなオーダーだから、ネーム入れるでしょ。ネームはまた別に〔下請けで〕出してたから、そういうところへ持って行ったり。糸を買いに行ったり。——当時、住み込みでご飯をいただいて、給料は1万円だったかな。

そこのひとは、「学校はちゃんと行きなさい」って〔言ってくれた〕。でも、あたしは、いずれ洋裁で〔身を立てよう〕と思ったら、学校〔＝定時制高校〕へ行かないで、洋裁の学校へ言ったほうがいいんじゃないかって話になって。で、そっちの学校に入れてもらった。

しかし、A さんは、勤め始めて「1年ぐらい」で、この仕事を辞めてしまった。そして、A さんが現在住んでいる地域に当時からあった、大手家電メーカーの工場に、勤めることに決めた。

家族ぐるみで「よくしてくれた」仕事を辞めた理由について、A さんは、つぎのように語っている。

《A さん》あたし、15〔歳〕で〔園から〕出てきたでしょう。それで、友達がいなくて。みんな、縫い子さんは、もうある程度の年齢、30代とか〔だったから〕。——その頃、ここ、〇〇〔＝大手家電メーカーの工場〕が、すごい忙しそうで、新聞にすごく大きく、募集が〔載っていた〕。芝生のあるナントカで、楽しいナンダカって。それが、なんかしらないけど、目に入ってきて。楽しそうな雰囲気が伝わってきたの。文面とかね。それで、惹かれて、辞めて、こっちへ来た。

そして、辞める前後の時期にわかったことだが、この「オランダ人の奥さん」は、A さんが敬愛園から来たこと、A さんの父親が敬愛園に入所しているということ、すでに「知ってた」という。ずっと「隠して」いた A さんは、そのことがわかったときに、「気まずい」思いがしたと語る。

《A さん》そこの奥さんが、あたしがあの〔＝敬愛園の〕中にいたっていうのを、知らないと思ってたら、〔じつは〕知ってたってこと、あとからわかって。気まずい気持ちになったのは〔たしかです〕……。あたしは、〔園で英語を教えてくれたオランダ人の〕先生が、〔わたしのことを〕あすこにいた人だっっていうことを言わないで、こっちへ来てるって思ったから。——ようするに、ウソをつくっていうか、親のこととか。ね。隠し

てるような感じで、言ってたけど。じっさいは、[わたしが] あそこにいる、親もそこにいるっていうことを、先生はこっちのひとたちには言ってたんですって。

あと、親も、[園から出てくるときには] 東京まで、あたしを、兄と連れてきてくれたんだけど……。親は、一緒に来てたけど、遠くから、見えて。そこのお嬢さんが[駅まで] 迎えに来てくれたんです。で、ほら、親は[わたしがお世話になる人たちが、わたしたちのことを] 知ってるって知らないし、遠くから見えて。どんなひとに連れてかれるのかなっていうの、見えて。うちへは、兄が連れてきてくれて。

たしかに、[親のことについては] 聞きもしなかった、むこうのひとたちも。でも、自分で、しゃべるときに、しぜんとかう、ウソをついてたっていうか。

自分のことをしゃべるときに「しぜんと、ウソをつく」ことは、その後も続いたし、現在も続いている、と A さんはいう。

《A さん》それはもう、ずうっと、社会へ出てから [も続きました]。いまも、友達関係とか [のなかで]。けっきょく、それは、ずうっとやてること。親のことに関しては。自分がいたところ [=敬愛園] も、そういうところにいたっていうのは、誰も知らない。

やっぱりあの、テレビで、[熊本地裁の違憲] 判決が出たじゃない。だからつって、わたしはこういうところにいた、親はここにいる、っていうのは、言えない。だって、いままでずっとウソついてきてるし。[判決が出て] だからつって、言えないのは、みんなおんなじ。だれも言えないと思う。

最近になって、A さんは、かつてお世話になった家の「お嬢さん」と、「何十年ぶり」で再会したという。

《A さん》お世話になった奥さんも旦那さんも亡くなって、お墓参り、このあいだ行って来て。[お嬢さんに]「お世話になったのに、なんもあれしないで、すみませんでした」って。それで、「おねえさん、知ってたんですよね？」ついたら、「ああ、そんなこと……」。「すみません、ウソついたりしてましたよね、あたし」とか。

だから、ホッとしました。なんか、心にずっとひっかかっていた。一生懸命 [よく] してくれたのに、辞めてきちやっただじゃないですか。やっぱ、若いときって、わからないこと、いっぱいある。いまだつたらたぶん、しない、と思うようなこととか、ね。

2.2 一対一のつきあいを「遮断する」自分／「学校の話」が苦手

大手家電メーカーの工員の仕事については、16歳のときだ。寮にはいり、「一部屋に女の子が8人」で暮らす生活だった。仕事は「二交替勤務」制で、「朝から働くのと、夕方から働くの、1週間で交替」だったという。

A さんは、おなじ職場の男性からプロポーズをされて、「19歳のおわり」で

結婚をしている。そのときの心情について、Aさんは、つぎのように語っている。

《Aさん》わたしも、こんな早く、19歳で結婚するなんて思わなかったんだけど。結婚というのは、あんまり〔考えられなかった〕。親があそこに入ってるんで……。

結婚を申し込まれて、「じつは……」言わないといけないじゃないですか。わたしがこういうところにいる、うちの親がこういうところに〔いるということ〕……。親がいなければ、言わなくてもいいけど、じっさい、いるから。うちの〔夫〕に言ったときも、やっぱり、即答はできなかったです。「一晩考えさせてくれ」と。次の日に、「それでもいいから」って。

「ダメ」っていう〔答えが返ってくる可能性〕の〔ほう〕が多いと思った。もう、言ってるときは、終わりだな、って感じ。そういう気持ちでないと、言えなかったです。

この男性とは、結婚する前に、「2年半」のあいだつきあっていた。Aさんとしては、当初は「結婚すると思わないで」いたという。

《Aさん》たぶん、〔結婚につながるようなおつきあいから〕逃げてたと思う。——あの頃は、もう、男も女も、若い人がいっぱいだったんです。だから、グループではね、けっこうおつきあいはしてたけど。でも、個々になると、どっかで、遮断する自分があったんです。このひとつも、〔デートの誘いを〕何回も、わたし、断ってる。でも、それでもこう、何回か何回か〔言って〕きたから、いま、一緒にいるようなもんで。それで〔むこうが〕めげてたら、一緒にはなってなかったと思う。——だから、やっぱりこう、否定するところはいつもあったような気がする。一対一でつきあうのは。

職場の「女どうし」のつきあいは、「ワイワイ楽しく」できたとAさんはいう。敬愛園のある鹿児島県の鹿屋（かのや）の出身のひとがまわりにいなかったため、Aさんは「気兼ねなく」ウソがつけたと語る。

《Aさん》たとえば、実家（うち）に帰るっていう話とか。助かったのは、鹿屋のひとがいなかったんです、寮のなかに。いたら、また、違って。「一緒に帰ろう」とか〔言われたら、困ったと思う〕。ここのひとつって、けっこう、東北生まれのひとが多くって。それでは助けられたかな。だから、ウソもつけたし。気兼ねなく。

やっぱり、学校の話がまったくあわないんです。外のひとと。だから、会話についていけないの、どうしても。給食の話とか、なるんです、けっこう。〔そうしたときには〕いいかげんにこう、〔話を〕合わせちゃったり。まあ、あのなかであったようなことを、ちょっと膨らませたりとか、そういうことはするけど。学校の話はすごい苦手。まあ、田舎の話だったらね、「こういう場所にいた」とかって言えるけど。学校の話になると、とたんに、ついていけない。

たまたま、おなじ鹿屋のひとがいたんです。だけど、そのひとは年代が違ったんで〔助かった〕。〔でも、いちど〕「鹿屋のどこらへん？」って、急に聞かれて。答えようがなくて。わたし、小さいときは鹿屋の町まで歩いて行ったけど、地名とかまったく知らなくて。返答が一瞬できなくて、地名は言えなくて、「えっと、車で走って、1時間だか2時間」って、変なこと言ったら、「Aさん、そんな走ったら、鹿屋の町、なくなっちゃうよ」って言われた（笑）。そのひとが年代が一緒だったら、もっと突っ込まれて、焦ったけども。そういう話は、パッと流して。だから、近くに〔鹿屋出身のひとが〕いなかったというのは、すごいラッキーだった。

敬愛園にいたことを「言っちゃいけない」という意識は、いつのまにか「身について」しまっていた、とAさんは語る。

《Aさん》誰かに言われたわけじゃないのに、これは言っちゃいけないことなんだっていうのは〔意識があった〕。その、言葉自体も、言えなかったもの。「らい」とか、そういう言葉自体も、なんか、飲み込んでるようなところがあった。

2.3 親どうしは1回も会ったことはない

父親が「朝鮮のひと」であることは、園の中にいたときからわかっていた。「あの中になん人かいて、〔朝鮮のひと〕どうして、〔朝鮮の〕言葉で、しゃべってた」とAさんは振り返る。

「お父さんから、なにか、朝鮮人であることを受け継いだものって、ありますか？」という聞き手の質問にたいし、Aさんは「歌」と答えている。

《Aさん》それは、お父さんというより、お父さんの友達が、〇〇さんという、やっぱりむこうのひとがいたのね。そのひとが、なんか、歌をよく歌ったりとか。アリランとか、2つ3つ、よく歌っていたんですよ。それが、なんとなく、頭の中にある。いまになって思えば、ちゃんと言葉なんかも、教えてもらえばよかったな、とも思うけど。

うちの父からは、あんまりないかもしれない。しゃべらないんですよ、自分の過去とか。母親のこととか。自分のいたとこや、きょうだいの話とか。

父親が「朝鮮のひと」であることは、園の中では「気になることではなかった」が、園の外に出てからは「言えない」ことになった、とAさんはいう。

《Aさん》外に出てからは、なんか、すんなりと言えない自分がいたりして。親がその、「朝鮮のひと」って。だって、日本人って、なんか、馬鹿にしてるじゃないですか。「チョウセン、チョウセン、バカにするな」とか。そういうのも、なんとなく、あの中にいても、わかってたんです。だから、「うちの父は朝鮮のひとなの」という言葉が、やっぱり、ここで飲み込んでちゃって。こっちへ出てきてからも、友達に、〔親が〕鹿児島にいるっていうことは言えるわけだけど、どこのひと〔＝朝鮮のひと〕っ

ていうのは、あらためては、言ったひとはいない。

もっとも夫にだけは、結婚するときに、父親が「朝鮮のひと」であることを話している。それでも、夫は、結婚の意志を曲げなかった。「ようするに、[わたしを]好いててくれた」のだと A さんという。両親と会わせても、夫の態度は「変わらなかった」と A さんは語る。

《A さん》結婚が決まった [年]、大阪の万博の年。うちの親がふたりで来て、はじめて、うちの [夫] と対面したんです。そのときに、うちの [夫] がけっこうよくしてくれた。箱根のほうに、チケット取ってくれて。それを、うちの親は、いまも「[よく]してもらった」って [話します]。うちの母 [= 継母] がちょっと、顔がこう、[後遺症が] あれかなあつていうところがある。でも、見てもべつに、手もつないでくれたし。態度も変わったわけじゃない。だから、そのときはホッとした。はじめて会わせてしよ。

あの万博のときに、夫婦ふたりで、軽 [自動車] で、ここまで来たの。鹿児島から。大阪万博、見ながら。すごいですよ。

結婚式は「ふたりだけ」でやった。お互いの親きょうだいや親戚は、いっさい呼ばなかった。夫の実家が東北地方で遠かったこと、それに夫が「長男じゃなかった」ことから、こうした結婚式が可能になり、「助かった」と A さんは語る。

《A さん》[結婚式も] なんにもしないつもりだったんだけど、写真だけは、子どもに見せたくって。写真を撮るのに、貸衣装、借りるじゃないですか。だったら、やっぱり、教会で式を挙げたほうがいいかなあと思って。で、立会人に友達だけ来てもらって。3 人だけ友達が来てくれて。で、教会でして、終わり。

A さんの両親が敬愛園に入所していること、父親が「朝鮮のひと」であること、A さんがかつて敬愛園にいたことについては、いまも、夫の親きょうだいには、話していない。さらに、A さんの両親と、夫の両親とは、まだ一度も、会ったことがないと A さんという。

《A さん》[鹿児島と東北地方で] お互いに遠かったっていうのが、そういう面では、助かった。むこうの親は、しょっちゅう、うちに来て。1 年に 1 回とか 2 回。わたしなんか、[夫の実家に] 帰ってた。[親どうしが、電話で] 言葉では [話を] したことがありますよ。——やっぱり、親をね、会わせないというのも、不思議だったと思います。[でも] そういう [ことを] うるさく言う親じゃなかったから。

ふつうだったら、親に 1 回も会わないでいるなんて……。うちの、いまの母親は、顔とか見ると [後遺症で] ちょっとわかるんですね。だから、わたし、子ども 2 人生んでるけど、むこうの義母 (はは) がやってくれたんです、手伝いに。うちの母親は、ちょっと病气ってことになって。ふつ

うだったら、自分の親が来るじゃないですか。だけど、むこうの親が2回も来てくれて。いろいろ助けられて。[だから] まあ、いま、こう、[むこうの親に] 打ち明けて [も]、どうなるのかなって、ぎやくに思います。

2.4 娘だけに話した

A さんには、聞き取り時点で「30歳」になる娘と、「27歳」の息子がいる。ふたりとも、すでに結婚している。

《Aさん》[子どもたちは、わたしの両親とは] それこそ、2、3回しか会ってないです。小さいときに1回、ここへ来て……。わたし自身も、あんまり帰ってなかった。もう、仕事、ずうっとしてて。ほんとに、うちの田舎に4、5年帰んなかったりとか。だから、子どもたちも、べつに帰ってないというのが、不思議がらない。遠いから助かってるんです、ほんとに。だって、おじいちゃん、おばあちゃんなのに [ずっと会ってないなんて]……。近かったら、そういうわけにいかない。

で、うちの旦那のほうには、毎年毎年帰って。むこうのおじいちゃん、おばあちゃんとは、しょっちゅう会ってて。

娘が高校生のとき、「自分の小さいときの話」の話題になったのをきっかけに、Aさんは、父親が「朝鮮のひと」であること、ハンセン病療養所に入所していること、自分もそこにいたことを、娘に話したという。いっぽう、息子には、いまでもこのことを話していない。

子どもたちに話すのを「躊躇する」気持ちについて、Aさんは、以下のように語っている。

《Aさん》自分も、重荷になって、ずうっと来たんで。そういうことを言っただけ、それを持たせるってというのが。べつに、なんでもないことなのに。いま、こうやって [話していても]、それを持たせちゃうって言うことが、なんかこう、そこを躊躇してる自分があるんです。……

うちの父親が朝鮮人だったことと、ハンセン病だったことと、重みが、なんか、2つあって。ずうっと、自分でこう、アレしてたから、軽く言えないんです。言えない自分があるのに、子どもにもね、ほかのひとにも、言えないじゃないですか、なかなか。言うってことは、やっぱり、タイミングがよっぽど……。なんか、娘と、たまたま、そのときは、タイミングがあっただすね。だから、言えた。それがなかったら、たぶん、いまでも言えなかった。

最近になって、Aさんは、娘と娘の子どもを連れて、敬愛園の両親に会いに行ったという。

《Aさん》娘に言ったことは、すごくよくて。曾孫も見せてくれたんで。

[敬愛園には] この9月に行ったんです。娘は、[わたしの両親とは] 小学校1年のとき会ったつきり、ずうっと会ってなくて。最近、[ハンセン病にかんする番組が] テレビでやってるじゃないですか。娘は、そう

いうあれで、アタマの中に、その、すごい〔後遺症が重い、というのを想像してみたみたい〕……。まあ、あの中で、そんな〔後遺症の〕重いひとはは会わなかったけど、「自分が思ってたよりは、そんなに、驚くっていうのはなかった」って、うちの親を見て。帰って来て、そう言っていました。

3 「わたし、戸籍がなかったんです」

聞き取りが終わったあと、3人で食事に出た。とつぜん、Aさんは、衝撃的なことを語りだした。その場でテープをまわせなかったので、以下は、“記憶おこし”である。

《福岡》あつ、ひとつ聞き忘れちゃったんだけどさ。Aさんは、自分を「なに人か？」っていうと、なに人だと思う？

《Aさん》なに人……

《福岡》まあ、自分は、どっちかっていったら、韓国のほうとのつながりが強いんだ、とか？

《Aさん》うーん、やっぱり、母とはね、つながりっていうのがないですからね。父のその、親戚とかがいるって思いますから、あっち〔＝韓国〕につながっていくかなって思いますね。

《福岡》まあ、普段、自分は「なに人か？」なんて意識しないことですからね。

《Aさん》これ、わたしも、中学卒業して就職するまで知らなかったことなんですけどね、戸籍がなかったんです。中学卒業して就職するのに、困るからって、母のところに入れてもらって。

《福岡》えっ？

《Aさん》わたし、なんでだかっていうのはわからないんですけど、戸籍がなかったんですよね。就職で、あそこ〔＝敬愛園の少女舎〕出るときに、それがわかって。いないひとになってたんです。どうしてそうなったか、わからないけれど。それで父が、母に頼んで。父も、母とは会いたくない気持ちがあったでしょうけれども、娘が、社会でねえ、これから就職するのに戸籍がなかったんじゃ大変だからってことで、頼んでくれて。そして、母も入れてくれたのね。だからあの、戸籍みれば書いてあります、いついつの時点で、母のところに入ル」って。だから、ねえ。まあ、生まれた時点では、出生届で、母の戸籍に入っていたわけだけれども。さっきのお話で「〔恵楓園の少女舎に〕入ったときの記録がない」って言いましたけど、そのときに、戸籍もなくなってしまったのか……³。

³ 2005年11月27日付けのAさんからのメールには、つぎのように書かれていた。

戸籍のことで〔星塚敬愛園の〕父に電話しましたが、私の戸籍がなかったこと、どうしてか父はわからないみたいです。兄のほうはちゃんと入籍されてて。〔私の場合も〕出生届けは出されているのに、入籍は別なんですね。園の中にいたので、べつに戸籍がなくても問題なく15歳までいられたんですね。卒業したときはあせったそうで、園の人が動いてくれたようです。

〔私の〕戸籍の写しです。

「昭和26年2月25日〇〇県〇〇郡〇〇村で出生母△△〇〇子届出

《福岡》はあ、そうなの。ほんと、そうかもしれないね。いや、なんで戸籍がないということがありうるのか、ぼくも理解できないんだけど、入所者のひとたちからお話を聞かせてもらおうと、けっこうねえ、「戸籍がなかった」という話、聞きますからね？

《Aさん》そして、母はねえ、そのとき、戸籍に入れてくれたんですよね。まあそれである、母にも迷惑をかけることもあったのかなあって思いますよね。

《福岡》あ、もうひとつ聞くのを忘れてたけど、その、Aさんはわりあいとお母さんにたいしてどんな気持ちをもってる？ 恨む気持ちって、あんまりないみたいだね？

《Aさん》恨む……、そうですね。恨むというのは、あんまり〔ない〕。母は、わたしが小学4年生くらい頃、いちど会いに来たことがありましたね。これは、〔少女舎〕先生が、同窓会のたびに「あなたのお母さんは会いに来てくれたねえ」とって、何度も話してくれることなんですけど。うん。なんだか、わたしを引き取りたいってということで、そのとき来たんです。だけどその、母のほうの生活能力がないということで、それはダメだったってことで。

《福岡》あ、お父さんが反対した？

《Aさん》はい、父はもう、絶対反対で。そして園のほうでも、なんか、反対したような。

《福岡》はあ、そう。Aさんは、そのとき、お母さんと会ったの？

《Aさん》そうですねえ。

《福岡》そうか。なんだ、ぼくは、お母さんとは一度も会ってないのかと思っちゃった。

《Aさん》それでもねえ、なんだかその、会ったときの、「おかあさん！」って駆け寄るっていう、その、感動的な場面っていうのを、わたしはまったく覚えてないんですよ。なぜか。ただ、うん、ああ、あのとき来たよねえ、というような。

《福岡》顔、似てた？

《Aさん》顔もねえ、ほんとにおぼろげで、もうほとんど覚えてない。ただ、写真が1枚だけ。父はその、昔のアルバムはほとんど焼いてしまって、そして、残ってる写真も〔母の〕顔のところが〔マジックで〕グシャグシャってなってる。ただ1枚だけ、残ってるのがあって。それ、いまはわたしの手元にあるんだけど。その1枚だけは。

だからね。その、母ひとりでも生活が苦しいところに、わたしを「引き取りたい」とって迎えに来てくれた、それだけでもね、うん。わたしを忘れてたわけじゃなかったんだなあ。だから、そんなに、恨むっていうのは〔ない〕。

《福岡》うん、うん。

同月 28 日〇〇村長受附★

昭和 41 年 4 月 8 日入籍]

私の戸籍は生まれた時点からなかったようです。本来なら★の後に入籍〔という文言〕が入っているはず。兄には入ってました。

信じられないような話だが、いみじくも、ハンセン病療養所が、戸籍がなくても生きていける特異な空間であったことを、指し示していよう。

《Aさん》むしろ、ほんとにわたしは、あそこ〔＝療養所〕に入れられて、自分はよかったって思ってるんですね。あの時代はほんとに、厳しかったですから。だから、〔ハンセン病家族・遺族の会「れんげ草の会」の〕〇〇さんでも、みんな、外にいたひとたちっていうのは、ほんとに厳しい体験されてますでしょう。わたしは、自分がどう、っていうことはなかったから。

《福岡》まあ、それは、たまたま、Aさんのおつれあいがいいひとだったんですよ（笑）。

《Aさん》ええ、そうですね（笑）。——で、母もね、おそらくほんとに、父のことが好きだったんだろうと思うんですね。やっぱり、あの時代に、日本人でない、朝鮮人の父といっしょになるっていうのは、ものすごく家族から反対されたわけでしょう。ふたりの籍が入ってないっていうのは、そういうことだと思えます。それでも、その反対を押し切ってでも、父といっしょになったわけですからね。そして、2人の子どもが生まれて。でも、思いがけないようなことがおこって……。

《福岡》そうか。だから、もし、お母さんの実家なんかに引き取られたとしたら、Aさんは、その、お母さんのほうの親戚に、ものすごく辛い目にあわされてたかもしれないね？

《Aさん》そうですね。だから、わたしとしてはまあ、うん、あそこに入ってよかったです。

《福岡》いやあ、それにしてもほんと、Aさんは、誰かを恨むっていう方向にはなってないですよ。どうして？

《Aさん》うーん、誰かを恨むっていうより……、まあ、そうですね、仕方がなかったっていうのかな。“自分はそういう運命なんだ”って受け入れる、っていうのかしら。そうするよりほかない、というのもあるしね。そしてね、じぶんがこういう体験してるから、やっぱり、ひとにたいしてはね、そういう〔差別的な〕目でみない、そういう自分であることができたっていうのは、よかったですと思うし。ほら、そういう体験があったから、きょうも、こういう出会いがあったわけだし。だから、うん。

Living in a *Leprosarium* until Age 15 despite Being Healthy: The Life Story of a Woman Whose Korean Father Was a Hansen's Disease Patient

Ai KUROSAKA and Yasunori FUKUOKA

This is the life story of A, a female in her 50s, who lived in a *Leprosarium* until age fifteen, despite the fact that she did not have the Hansen's disease. Her father is a first-generation *Zainichi* Korean, who emigrated from the Korean peninsula to Japan during the Japanese colonization period. He developed Hansen's disease two years prior to A's birth. A's mother is from the Kyūshū region.

When A was about one-year old, her father was committed to a *Leprosarium* in the Kyūshū region. Shortly thereafter, her parents separated, and the young A started living in the sanatorium with her father. At the sanatorium, there were many children of the same age, and they studied at a primary school inside the facility.

When she was 15, she decided to leave the sanatorium to work in the Kantō area. At this point, she learned that her *koseki*, or family register, did not exist. Her father contacted her mother, and A was added to her mother's family register.

Soon after leaving the sanatorium, she was conscious of hiding the facts that "my father is at a Hansen's disease sanatorium" and "I used to be there once". While chatting with colleagues at work, she "naturally" lied when the topic of discussion came to their hometowns and the schools they attended. A relates that this consciousness continues to the present.

When A was 19, she married a colleague from work. Before their marriage, she disclosed to her husband that her father is a "Korean" who "is at Hansen's disease sanatorium," and that she used to be there once, but her husband's intent to marry her did not change. However, they have been hiding these facts from A's husband's parents up to the present. Their wedding ceremony was held without inviting their parents. Furthermore, A's father and A's husband's parents have not met yet. This has been possible because they live far from each other, and, as A says, she was "lucky."

A has a daughter and a son, both of whom are already married. At this point, the children have met A's father only two or three times. When her daughter reached high school age, A told her about her past. Recently, A visited her father at the Hansen's disease treatment facility with her daughter and her daughter's child for the first time. However, she has not yet told her son about her secrets. The facts that her father is a "Korean" who "is at a Hansen's disease treatment facility" have been a "burden" that she has had to hide from others for years. She says that she is hesitant to place this "burden" on her son.

Keywords: life story, Hansen's disease, *Zainichi* Korean